

私の大好きなところ

寄藤陽子

(大学研究補佐員)

私は十四年ほど勤めた都内の私立幼稚園を辞めました。子どもたちがお弁当を持って、お父さんお母さん、時にはおじいちゃんおばあちゃんと一緒に歩いて来たり、自転車の後ろに乗ってきたりして毎朝通ってくる、いわゆる地域の普通の幼稚園でした。卒園した小学生たちが学校帰りに寄り道してきたり、地元の中学校に進んだ子が「保育体験」や「職業体験」と称してやって来たりもします。卒園児がお父さんお母さんになってわが子を入園させる、なんてこともよくある幼稚園です。実は小さいころ、私自身も通っていた出身園で

もあります。内弁慶で家の中では大威張りのくせに、外に出るとからっきしダメだった当時の私は、二年保育で入園したものの、最初の一年は毎朝「登園拒否」をしていました。「行きたくない」と大泣きし、子どもの足でも五分とかからない道のりを、行きつ戻りつ数十分。私が登園するころにはもうみんな朝の遊びも朝礼も済ませて保育室にそろっており、何だかバツの悪い気持ちでタオル掛けに掛かった自分のタオルをじっと見つめていた記憶があります。それにしても、わが母親も毎日あきらめもせず、泣き続ける娘を引っ張り、なだめ、

よくぞがんばって登園させたものです。だからこそ幼稚園で過ごす楽しみも少しずつわかっていったのでしよう。

しかし、まさかそんな子どもが大きくなって幼稚園の先生になるとは……そしてそこまで長く勤めることになるうとは……そのころ、誰が想像できたでしょう？ そんなわけで、辞めても今なお思い出の詰まった、そして私の中で「幼稚園」そのものの基準となっている、大好きな場所なのです。

さて、その幼稚園から離れてみて、今、私は二種類の「さみしい」を感じています。

一つ目は、これはある程度予測はしていましたが、子どもの声の聞こえないさみしさ。生身の子どもと触れ合ったり、話したり、笑い合ったり、一緒にご飯を食べたり、泣いたり、なぐさめたり、励まし合ったり……そういうことができなくなっ

たこと。それから、そうした子どもたちの日々の出来事を共通の話題として、一緒に働く同僚たちやお迎えに来た保護者たちと分かち合う楽しみがなくなったことでした。年齢、世代、立場を越えたコミュニケーションに満ちあふれていた幼稚園という場が、どんなに私にとって心地よく、生きる糧となっていたかを、その場を失ってみて初めて気づくことになりました。もちろん、実際はいいことばかりではありません。私の至らなさから保護者や上司や同僚に多大な迷惑をかけたこともありましたが、「子どもたちに悪いことをしちゃったな……」と今でも胸がチクリとする苦しい思いもあります。でも、それをも含めて、やはり私は幼稚園の先生という仕事が好きだったのだな、と思います。だから今、さみしいと感じるのだと思います。

もう一つの「さみしい」は、正直に言って、私にとってまったくの想定外であり、このさみしさ

に気づいた時、私はかなりの衝撃を受けました。

それは、現代の日本では、季節や行事をスルーして生きていくことができるのだ、ということでした。極端な例を挙げれば、豆まきをしなくなつて世の中は何も変わらないし、色とりどりの七夕飾りを作つたり短冊に願いを込めたりしなくても生活に何ら変わりはない、ということですよ。何も秋に泥んこになつて土を掘らなくても、年中いつでもさつまいもはきれいに洗われた状態で店頭に並んでいます。お餅つきをしなくても、スーパーで真空パックの切り餅は買えるのです。もちろん、伝統行事を大切に、日本ならではのそれぞれの季節の美しさをめながら生活している方はたくさんおられるでしょう。しかし、そんなことはお構いなしに生きていくことは実は簡単なことなのだと気づいた時、とてもショックでした。

幼稚園の一年間はある意味、本当に規則正しく、日本の伝統的な行事や季節の移ろいを軸に活動が展開しているといつても過言ではありません。普

通に仕事をしていれば、子どもたちと一緒にさまざまな行事を体験し、何よりも一緒に楽しむことができたわけです（当然、保育者側は準備やら後始末やらに大わらわで、ただ単純に楽しむというわけにはいきませんが……）。また、行事や文化、季節の様子に子どもたちの関心が向くようになりキュラムを考えたり、行事の由来をわかりやすく知らせるために、自分なりにいろいろ調べたりもしました。例えば節分で豆をまくのはなぜ？とか、どうして鬼は虎の皮のパンツをはいているのか？とか、ひなあられや菱餅の色の意味って……などなど（おかげでいろいろな知識や雑学も増えました）。

しかし振り返ってみると、実はそうした仕事の一つひとつが私自身の生活の軸になっていたなあと感じるのです。ですから、幼稚園を辞め、まったくそんなことと無縁な時間を過ごしてみても、本当に心から「さみしい」と感じたのでした。そして「私って、実は、日本のことが好きだったんだ」

と気づいたのでした。幼稚園は（もちろん保育園
も分かりですが）日本の伝統行事を守る最後の砦^{とりで}
なのではないか？ 幼稚園の先生ってある意味、
日本文化の継承者なのではないだろうか……とさ
え思うようになりました。そう考えると私ってす
ごい仕事をしていたのだな、と少しばかり誇らし
くすら思えるのでした。

もちろん、例えば五月の空にこいのぼりを見つ
ければ、思わず季節の歌を口ずさんでしまうし、
どうしたって五月五日は柏餅が食べたくなって和
菓子屋さんに立ち寄ってしまう……そんなことは
あっても、やはりそれだけではちよっぴり何かが
足りないのです。みんなをやつていた感、という
か、人間を含み包み込んだ行事や習慣、活動の雰
囲気が足りないのです。柏餅をパクついただけで
はすつきりしない何かがありました。もちろん、
無い物ねだりのさみしさ、と言ってしまえばそれ
までののですが……。しばらく幼稚園の現場から

離れてみて、やはり私は幼稚園の仕事が好きなん
だなあと実感しています。

さて、そろそろ子どもたちの声のする現場に戻
ろうと思います。今度はどんな子どもたちに出会
えるか、ワクワクしています。

